

---

# ACUTE ~悲劇~

偽りの仮面

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ACUTE～悲劇～

### 【著者名】

N3135BA

### 【あらすじ】 偽りの仮面

歌にあるACUTEをストーリーにしてみました！  
この物語のキャラは、自分のイメージによる物です！  
それでも良ければどうぞ・・・！

彼女達の悲劇の運命が今・・・回り始めた・・・

## プロローグ（前書き）

「いつもみんなさん…おせよハラダこまく…いんじゅうせ…いんばんせ…  
偽りの仮面です！  
勝手ながら歌であるAJOHTEを自分流に物語を作つてみました！  
読んでくれたら幸いです！」

## プロローグ

初音ミク

緑色の髪をした16歳の少女。ネギ類が大好き

巡音ルカ

ピンク色の髪をした20歳の女性。桜餅が大好き

カイト

青色の髪をした男性。アイスクリームが大好き

第三者 side

ドス

冷たく湿った部屋にその音は響いた

そこには、三人の男女があり・・・緑色の髪の女の子が青い髪の男性をナイフで腹部を刺していた

男性からは、血が滴り落ちていた

そして・・・その男性は倒れた

後はもう・・・沈黙だけだった

その時・・・緑色の髪をした少女は男性を刺したナイフを首にやり・

ピンク色の髪の女性に

「・・・ わななら・・・」

と言い、自分の首をナイフで切った・・・  
なぜ、このような悲劇が起きたのだろうか・・・

それは、一週間前にさかのぼる

ミク side

ミク・・・部屋で就寝中

「ふあーあ」

あぐびをしてミクは起き上がる

うーん・・・眠たい

もう一度寝ようかな・・・?

ミクは枕に頭を置き寝ようとしたら、チラッと見えた目覚まし時計  
にびっくりした

「あつー今日は、カイト君とルカさんと一緒に遊園地に遊びに行く  
んだーー!」

ミクは、ベットから飛び起き急いで準備をして集合場所に行つた  
そこには、綺麗な黒のスカートを着たルカさんとかっこいいタキシ  
ード?みたいな服を着たカイト君がいた

「カイトくん！…ルカさん！…」

ミクは、大きな声で言った

カイト君とルカさんは、体をピクッと動かして振り向いた

「『めん…』待つた？」

カイト君は笑つて言った

「ううん、今来たところだよ」

うわ～ん…うれしいよ～！カイト君優しい～！

その時、ルカさんがちょっと顔をしかめて言った

「遅いですよ。本当はもうすぐ待つてたんですから」

う～ん…そんなに言わなくとも…

ショボ～ンとしてるミクやちょっと顔をしかめてるルカさんをカイト君は「まあま」と必死になだめた

「じゃ…じゃあ、行こつか！」

カイト君は、ちょっと動搖しながらミクとルカさんの手を握り遊園地に行つた

こうして・・・悲劇への歯車は廻り始めた  
彼女達は、未来・・・どうなることかも知らずに・・・

## プロローグ（後書き）

どうでしたか・・・?  
おもしろく読めたなら幸いです！

## 楽しい遊園地

ミク si de

みんな～！今、ミク達はジェットコースターに乗ってるよ～！  
楽しみ～！

横を見るとカイト君がブルブル震えていた

「カイト君大丈夫？」

カイト君は、顔が引きつりながら笑顔で言つた

「だ・・・大丈夫だよ」

「ふう～ん」

奥には、ル力さんが座つていて冷静な感じだった  
そして・・・店員さんが「いつてらっしゃい！」と笑顔で言つた瞬  
間、出発した  
数分が経つた後、無事終わりミクは軽い足取りで降りた

「はあ～！楽しかった！！ねえ！ル力さんやカイト君も楽しかった

よね？」「

ルカさんは、出発する前の表情でジェットコースターから降りて言った

「そうですね、まあこんなものでしょ」

はは・・・相変わらず笑顔を見せない・・・

「カイト君は？」

ミクは、カイト君の顔を見てびっくりした  
カイト君の表情はもう死にそうみたいな表情だつたから

「だ・・・大丈夫カイト君！？」

カイト君は、おぼつかない足取りでジェットコースターを降りて言った

「だ・・・大丈夫だよ」

え～・・・大丈夫じゃないでしょ・・・  
まあ・・・そんなこんなで次は、お化け屋敷！と思つたんだけど・・・  
・カイト君はやっぱりもつだめみたいでベンチでダウンした  
何でこうなるの――――！

本当は、もつとカイト君と親密になりたかったんだけどな  
まあ、仕方ない！ルカさんと2人で行くか――！

「ルカさんー！ミク達で、他のアトラクション乗る？よ

ルカさんは、何一つ表情を変えないでこう言つた

「別に・・・構いませんが・・・」

「よしー!レッツゴーーー！」

そして、ミク達は色々なアトラクションに乗つた  
そして、もうお昼になつてお腹が空いてきた  
ミク達は、カイト君の方に行つた  
カイト君は、復活していた

「カイト君ー！もう大丈夫なの？」

カイト君は、いつも通りの笑顔を見せこいつ言った

「うんーもつ大丈夫だよー！」

「そつかーー良かつたーー！」

その時、グウ～とミクのお腹がなる音が聞こえた  
ミクは、急に顔が熱くなるのを感じた  
その時、カイト君が笑顔で言つた

「じゃあ、お昼飯食べよつかーー！」

「うんーー！」

こづして、楽しい時間が過ぎていっていつた  
カイト君はいきなりある提案してきた

「思ひ出写真を撮つてもうるわしく」

「写真?」

「そう、三人の思い出の場所として」

「思い出の場所かあ～うん！いいね！撮ろ撮ろ！ルカさんは、ビツ  
？」

「私は、良いですよ

「やつたー！」

「決まりだね、じゃあ、写真を撮つてもらえるよしひと頼みに行って  
「おるよ

カイト君はさう言つと近くにいたカメラマンさん[アーティスト]が写真を撮つても  
らえるよしひと言つた  
カメラマンさんは快く引き受けてくれた

「じゃあ、私が合図したら撮りますのよしひお願いします！」

「では、1+1=・・・」

「「」」

これを二回へりへり繰り返した

「はい！オッケーです！」

そして、カメラマンせんはそいつ言つと//ク達に写真を渡した  
きれいに撮れてた！やつたー！

「ありがとうカイト君！大切にするねー！」

「うん！良かつたよ！」

そして、夕方になつた

「はあ～！楽しかった！ありがとうねカイト君～遊園地に誘つてもら  
つて！」

カイト君は、微笑んで言つた

「ううん、こっちもありがとう・・・楽しかったよ」

わーい！

カイト君が、楽しかつたつて～！

うれしーい！！

ミクが嬉しがつている中カイト君は、ルカさんの方を向いてこいつ言  
つた

「ルカもありがとう」

珍しく、ルカさんの頬がピンクに染まった  
その時、ミクの心のどこかで何か締め付けられるような感覚に襲わ  
れた

何だろ？この気持ち……なんて言つか……カイト君が取られ  
ていくような感じが

いえ……これは気のせい！気のせい！

そして、みんなは解散してそれぞれの家に帰った  
ミクは、帰つてる途中、呟いた

「まだ……残ってる……あの……気持ち

運命は廻り始めた  
歯車のように  
ゆっくりと・・・

第三者 side

運命の日まであと

6日



## 楽しい遊園地（後書き）

誤字脱字等ありますが、暖かい日で見てやつてください

## 遊びに行つた！（前書き）

すみません！少し短めです！

遊びに行つた！

ミク side

小鳥の鳴き声でミクは、目覚めた

「う～ん・・・朝か・・・」

そう呟くとミクは起き上がり、顔を洗い、歯を磨き、服に着替えて、朝食のトーストを食べた

今日の予定は・・・なし。でも！予定がないなら作ればいい！といふことで、カイト君の家にゴー！！

ミクは、靴を履きドアを開けてカイト君の家に行つた。ミクは何度もカイト君の家に行つてるから道を知つていた。そして、家についてインター ホンを鳴らした

ピンポーン　ピンポーン

「はーい」

とカイト君の声が聞こえた

ガチャッ

とカイト君がドアを開けた

そして、ミクを見ると笑顔でこう言つた

「どうしたの？ミク」

ミクは、笑いながら言った

「実は、今日暇だったから遊びに来たの！・・・ダメ・・・かな？」

「そんなことないよ、遊び」

カイト君は、変わらず笑顔をミクに見せて言った

「やつたー！」

ミクは、喜びながらカイト君の家に入った  
その時、カイト君が言った

「ちょうどビルカも来てるから」

ドクン

また、胸を締め付けられるような感覚がまたミクを襲った  
く・・・苦しい・・・

その時、カイト君が心配そうな表情でミクを見て言った

「大丈夫？顔色が悪いけど・・・」

「だ・・・大丈夫」

ミクは、笑つて見せた

カイト君は安心したような表情で言つた

「そりか・・・良かつた」

その言葉を聞いた時、胸を締め付けるような感覚は消えた  
不思議だつた・・・何なの・・・これ・・・?

そんなことを、考えてるとカイト君の部屋に到着した  
カイト君は、ドアを開けてくれた  
目の前にはルカさんがイスに座つていた

ドクン

また、胸を締め付けるような感覚に襲われた  
しかしミクは、それを必死に抑えていつものように笑顔でこいつ言つた

「あれ? 何でルカさんがここにいるんですか?」

ルカさんもいつもと表情を変わらず言つた

「はい、実は以前ここで遊んだときに忘れ物をしてしまって取りに來たのです」

「ふう〜ん、そなんだ!」

その時、カイト君が入つてきてこいつ言つた

「じゃあ、みんなでトランプでもするか？」

「そうだね！」

そう言ひてミク達は、トランプをした  
最初は、ババ抜き！

でも、やつてる途中にミクの手札のクローバーのHースを見た途端  
に何かどっかで見た覚えがあるような感じが・・・まあ、いいや！  
そして、ババ抜きが終わり、カイト君はトイレに行つた  
カイト君がトイレに行つてゐる間に、ミクはルカさんこづーと気にな  
つていたことを質問した

「ねえ、ルカさん」

「何ですか？」

「カイト君の事・・・好きでしょ？」

## 遊びに行つた！（後書き）

一つ皆さんに疑問に思う所がありましたね！  
そうです！

ミクが、どこかで見たことがあると言つたあのクローバーは、人柱アリスで出てきたミクの手の甲に付いてたクローバーのマークです！  
ちょっとした、小ネタです！  
これで、楽しんでもらえると幸いです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3135ba/>

---

A C U T E ~悲劇~

2012年1月10日22時49分発行